

海後磋磯之介、明治に死す（上）

明治36年（1903）5月17日早朝、水戸市天王町で一人の「幕末の志士」が息を引き取りました（享年76）。彼の名は海後宗親（通称は磋磯之介）。

安政7年（1860）3月3日、時の幕府大老・井伊直弼を襲撃（桜田門外の変）した水戸脱藩士ら18人のうちの一人にして、事件後も生きのびた2人のうちの一人です。

この磋磯之介の数奇な生涯に注目したのが、文豪吉川英治でした。小説『旗岡巡査』（『週刊朝日』昭和12年〈1937〉初夏特別号）は、桜田事件後、下総松戸の醤油船に匿われ、船主権十とその娘お松の機転に助けられた磋磯之介が、烏山近くの実兄高野糸之介宅（現常陸大宮市小田野）とその裏山に潜伏するが、そこで恋仲のお那珂との別れを経験する、明治9年（1876）、「旗岡剛蔵」と名を変え、茨城県の結城警察署に勤務する磋磯之介は、派遣先の横浜・異人屋敷で殺人事件に遭遇する、男を殺した元花魁は何と約16年ぶりに邂逅した「お松」、そしてお松が殺した男の妻は、かつて恋い焦がれた「お那珂」だった…、といった内容ですが、早くも3年後の昭和15年（1940）には映画化されています。



▲海後磋磯之介潜居址（小田野地区）



石井 裕 氏
近現代史部会専門調査員
茨城県立歴史館主任研究員

映画『旗岡巡査』（牛原虚彦監督、依田義賢脚本）は、松戸の船主権十が磋磯之介を密告しようとし、また磋磯之介を助けようとした「お松」が旧彦根藩士渡辺幾三郎の妾となって現れ、「先君の仇」と磋磯之介に斬ってかかる渡辺をピストルで撃ち殺した、などと随所に脚色がなされ、この映画は「本年度のベスト・スリーとなろう」（『キネマ旬報』709号、1940年3月）と、高い評価を得ました。映画の反響もあったのか、翌年、磋磯之介の潜伏先である高野家に、記念碑「海後磋磯之介潜居跡」が建立されています。

旧彦根藩士の復讐をおそれ、明治を変名で生きた、というあたりは、まるで映画『柘榴坂の仇討』（若松節朗監督、2014年公開、浅田次郎原作）を思わせるような展開ですね。では、明治を生きた磋磯之介の実際の姿は、どのようなものだったのでしょうか？

（次号につづく）



▲旗岡巡査（広告）

■問い合わせ■

文化スポーツ課

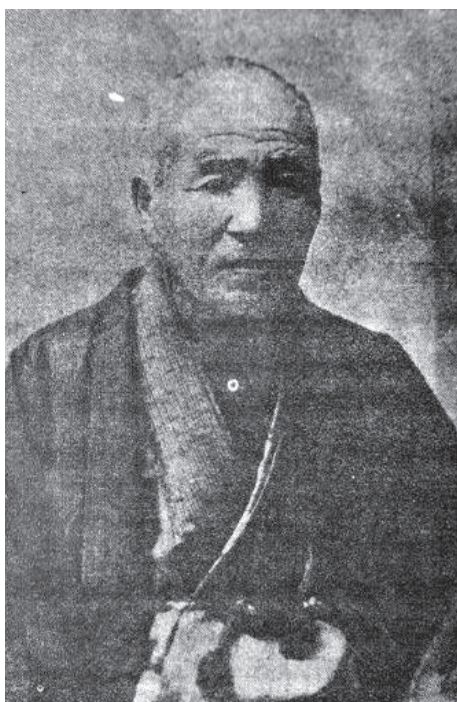
文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)

海後磋磯之介、明治に死す（下）

幕末の志士、海後磋磯之介の臨終に際して、宮内省の実力者・香川敬三皇后宮大夫（現常陸大宮市下伊勢畑出身）に届けられた海後宗親（磋磯之介）の履歴書には、桜田事件後、大坂の高橋多一郎とともに拳兵しようとしたが、幕府の詮索が厳しいため西上できず、越後に潜行した。元治元年（1864）の天狗党の乱では「海野剛蔵」と名を変えて水戸に舞い戻り、武田耕雲斎らについて那珂湊合戦を戦うも敗れ、同年10月25日に関宿藩に預けられた。明治元年（1868）2月に許されて水戸に戻り、同22年（1889）に「菊池氏」を名乗り、36年5月（正確には死去前日の16日）に「海後」に復籍した、とあります（明治36年5月17日付、香川敬三宛高橋諸随書翰、「香川家文書」3181、学習院大学蔵）。

死の前日に、念願の「海後」姓に復した磋磯之介。墓表の撰文も担当した高橋諸随（多一郎の養子、金子孫二郎の子）の香川宛書翰には、磋磯之介は「折々卒倒ノ如キ持病」（癩癩か）があり、5月15日の朝、炬燵にあたっていた際にその持病が起きた、足が火の中に入ってしまい、高熱を発して人事不省の状態におちいった、あと数日ももたないだろう、とあります（5月16日付、「香川家文書」3183）。

高橋は、磋磯之介へ最後の名誉を、と生前の叙位を



▲海後宗親肖像（72歳、『海後磋磯之介宗親遺録』所収）



石井 裕 氏
近現代史部会専門調査員
茨城県立歴史館主任研究員

香川に歎願しましたが、その願いはわずか2日後の18日に「従六位」の宣下という形で実現します。報道等では、磋磯之介は18日午後4時に「脳病」で死去した（『東京朝日新聞』5月20日付）となっていますが、これは叙位後に死去日時をあわせたものでしょう。当時の旧藩士たちの同郷人への思いの強さ、そして政府による同志の顕彰を実現することで、自分たち（旧水戸藩）の足跡を歴史の中に刻もうとする、彼らの心性がよくわかるエピソードです。



▲海後宗親墓碑（水戸市・常磐共有墓地）

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)

氏神様いろいろ

氏神の意味

常陸大宮市では、毎月どこかで、「氏神様のお祭り」が催されています。氏神というと、神社にいる地域を守護する神様や、その神様が鎮座する神社をイメージするかもしれません。大字単位で行われる祭りの神社の神様は大字の氏神、坪の氏神祭りの神様は坪の氏神というように氏神には色んな種類があります。氏神は、地域（旧町村・大字）を守る神様、同姓の集団を守る神様、個人の屋敷を守る神様がいます。住む土地の集団（地縁）、同じ姓や同じルーツをもつ集団（血縁）を単位に祀られているのが氏神です。地縁、血縁それぞれの集団を単位に祭祀規模が組織されている神様の総称と捉えてもいいかもしれません。

氏神祭祀の最小単位は個人の屋敷です。屋敷に小社・小祠を設けて年に一回、社を一新します。次に大きいのが同じ姓で集まる祭祀です。一族の本家筋に集まり、社を一新し、共同飲食をします。ワラホーデンを作った記憶はありませんか。あるいは氏神様の前で普段は食べない赤飯や御煮しめ、餅を味わった思い出はどうでしょうか。

それから姓ではなく、坪や大字といった地縁での氏神様のお祭りへと規模が広がり、祭祀には神職による神事や餅まき、神輿巡行などが伴ってきます。暑いなか神輿を担いで大字を練り歩き、力を自慢した夏はいつの頃だったのでしょうか。

祭祀組織との関係

かつて数軒でしていた氏神様のお祭りが今は一軒、



▲長田地区 K 姓の氏神祭り



渡瀬 綾乃氏

民俗部会専門調査員（筑波大学大学院生）

二軒だけ、あるいは話し合いの末、数年前から祭りを休んでいるというのはあちらこちらで聞く話です。とくに坪や同姓の氏神は、その集団の居住地が背にする山中にあることも多く、参拝の難しさが継続の弊害になることがあります。人の営みのなかで生まれた行事が、暮らしのうつろいのなかで変化するのは自然の流れです。

同族や坪の氏神の社がワラホーデンから木や石の祠へ、飲食が当番の家から飲食店へ変わっていく。このような徐々に起きる変化は新聞やテレビで報道されることはありません。しかし、山中に残り続ける氏神や、社に残された神輿のルーツであり、そこにこめられた祈りは、祀ってきた集団の由来や背景を象徴するものです。民俗部会として、それらを記録し文字に残すことは、市の歴史を編さんする事業として、大切な一つだと考えています。



▲諸沢地区 N 家の氏神（石祠とワラホーデン）

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)

鳥類の調査状況及び成果

常陸大宮市の市史編さんのため、2017年の4月から鳥類の調査を実施してきました。

2018年からは那珂川水系を調査しました。市内の17地点を選び、種類や数を毎月調査し、月変化の状況など鳥類の概要を把握しようとしたものです。この結果120種の鳥を確認することが出来ました。2018年度の詳しいデータは「常陸大宮市史研究第3号」で紹介します。その内の一部を紹介します。

鷲子山では、12月にアトリが100羽ほど群れる姿が見られました。この地区が冬鳥の越冬地として重要な地区となっていることを示しています。

花立自然公園では、2月にアオバトが見られました。冬季に南下してきたか、あるいは山林から海岸まで海水を飲みに行くという珍しい習性をもつこの鳥が、途中で一時立ち寄りしていたかと思われます。

チョウゲンボウは、12月に野口平の水田の上を飛び回り、ホバリングする姿が見られました。好物のネズミ類を狙っていたのでしょうか。

私は、この3年ほどの調査で、常陸大宮市内の特に里地里山と言われる自然環境の豊かさに触れることができました。サシバなど貴重な種が普通にみられたり、川辺でカモの仲間を見ていると狐と顔を合わせたか、行くたびに新しい発見がありました。

今年度の録音による調査では、数が減少しているヨタカなどの鳴き声も確認できました。今後、得られたデータをまとめていきたいと考えています。



仲田 立 氏 (茨城生物の会)
自然部会専門調査員



▲アトリ (鷲子地区)



▲アオバト (高部地区)



▲サシバ (小舟地区)



▲チョウゲンボウ (野口平地区)

■問い合わせ■ 文化スポーツ課 文化・スポーツグループ ☎52 - 1111 (内線344)



現代の魔術、デジタル写真

市史編さん事業の考古部会で文化財の写真撮影を担当する飯島です。文化財の撮影をしているとデジタル写真は、便利なようで面倒だな、ちょっと不安だな、と思うことがあります。記録や保存・活用を考えた場合、どうしても撮影後のひと手間が必要になるからです。PCを開いて最良の画像を選択し、データの情報(名称や記録方法、データ量等)を入れ、今後の活用(HPでの公開、パンフの作成、ポスター制作等…)に備えなくてはなりません。データ量によって用途が制限されることを考慮しておきます。併せて、誰にでも使えるように、どこにどのように整理しておくかも重要です。これらは非常に面倒で手間のかかる作業です。

家庭でも子どもの入学式や運動会で撮影したデータはどこに保管されているのか、という問題が起こります。ある学校では記念誌を刊行するにあたり写真を収集したところ、古い写真は存在しても、ここ10年間の写真が見当たらないということがあったそうです。わが家でも上の子のアルバム数(フィルム撮影)に比べ、下の子のアルバム数(デジタル撮影が多い)は少ないです。だからと言って、今更データを開け、チェックし、プリントするなどとても…。その上、際限なくシャッターを切っているからデータ量(撮影枚数)は膨大で、撮影内容も忘れていた。整理用のハー



飯島 一生氏
考古部会協力員
(茨城県埋蔵文化財センター)

ドディスクは壊れないのか?そもそも今の記録媒体(DVD、SDカード等)や記録方法(JPEG、ROW)はいつまで生存するのだろうか。VHSや8ミリビデオデッキと同様にメーカーが生産停止したら、新しいものに書き換える?それは大変だ。

しかし、デジタル写真は安価で綺麗、データの共有が速くて、とても便利です。市史編さん事業においても、デジタル写真の良さを生かし、市民の皆様が見やすく、少しでも地域の歴史や文化財に関心を寄せていただけるような写真を掲載できるよう頑張りたいと思います。

※i Cloudがあるとはいえ、先日スマホが固まった際に、修理店のおねえさんに「リセットしていいですか?」と言われた時の恐怖は、忘れません。



▲ライティングによる見え方の違い(左:縄文土器 右:硬玉製大珠)

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111 (内線344)

頼朝を叱った Tough Guy
 岩瀬与一太郎の故郷

金砂山での戦いで、佐竹氏が頼朝軍に敗れた直後、頼朝の前に、捕縛された「佐竹家人」10数人が引き立てられた。その中の一人が激しく啼泣している。頼朝「なぜそんなに泣いているのだ？」／男「(常陸国府の大矢橋で騙し討ちにあった主人) 佐竹義政のことを想うと、自分が生きていることが申し訳ないのです」／頼朝「そう思うのなら、なぜその時主人とともに命を捨てなかったのだ？」／男「頼朝さまにお会いして申し上げたいことがあったのです」／頼朝「申してみよ」／男「頼朝さまの敵は平家ではないのですか？なぜ罪のない同じ源氏の一族・佐竹氏を討ったのですか？今後、頼朝さまの敵はいったい誰が退治するのでしょうか？頼朝さまのご子孫は誰が守護するのですか？今はあなたの威勢に押されてみんな従っているだけですよ！」／頼朝「・・・」(無言で退席)

その後、上総広常が「即刻、首を刎ねましょう」と進言するが頼朝は制止し、そればかりかこの男の罪を許して御家人の列に加えた。この男こそ岩瀬与一太郎であった(『吾妻鏡』より)。

与一太郎に関する同時代史料はこれが唯一です。その本領について、これまで私たちは当たり前のように久慈西郡岩瀬郷(市内上岩瀬・下岩瀬)とってきました。ところが近年、中世史研究の大家たちが、与一太郎の出身を中郡莊岩瀬村(現在の桜川市)とみなす論文や著書を相次いで発表したのです。彼らの説は、史料的裏付けを欠き、または史料の誤解により導かれ



▲岩瀬与一太郎諫言図絵馬
 春日神社(岩崎)蔵



高橋 修氏
 編さん委員長
 (古代・中世史部会長)
 茨城大学 教授

たものですが、放っておけば誤った歴史像が定着してしまいます。そこで与一太郎の本領を、きちんと確定しておくが必要になりました。

上岩瀬・下岩瀬周辺には、今も多くの与一太郎の伝承が残ります。誕生寺の境内に遺構をとどめる上岩瀬城は与一太郎の居城と伝えられ、加藤寛斎の『常陸国北郡里程間数之記』にも記述があります。下岩瀬の春日神社も与一太郎が信仰したことを伝えています。久慈川西岸の根本や泉、岩崎などには連なるように春日社が鎮座しています。藤原氏の氏神・春日明神信仰とかかわりが深い武家は、将門を斃した藤原秀郷の子孫です。佐竹氏に宿老として仕えた小貫氏が所持した系図には、秀郷流藤原氏の流れを汲むこと、与一太郎が小貫郷を与えられたことなどが語られています。中世、子孫として与一太郎伝説を管理したのが小貫氏だったのです。

もちろん一次史料により確定できるわけではありませんが、市内の与一太郎伝承が、確実に近世以前にさかのぼり、中世、それを管理した主体が小貫氏だったことは、与一太郎の本領を久慈西郡岩瀬郷と確定する上で大きな成果と言えると思います。

高橋修先生による岩瀬与一太郎の詳細な研究成果につきましては、3月に刊行された『常陸大宮市史研究 第3号』に掲載されています。興味のある方はぜひご覧ください。
 ※歴史民俗資料館と文書館で販売中
 (1冊700円)

■問い合わせ■
 文化スポーツ課
 文化・スポーツグループ ☎52-1111 (内線344)



豪農、幕末の水戸藩を記す

幕末の水戸藩は、九代藩主徳川齊昭^{なりあき}の就任以降^{もん}、門閥派と改革派の対立が続きました。内憂外患の社会情勢と、尊王、敬幕、君恩といった思想が交錯し、やがて元治元年（1864）の那珂湊戦争や、明治元年（1868）の弘道館の戦いなどの藩内抗争につながっていきました。そこには藩士ばかりでなく、水戸藩領の村々の山横目^{やまよこめ}、庄屋、郷士、神官、郷医そして農民たちも参加していたのです。

齊昭は生涯に3度、幕府より咎めを受けました。

「小金記談」は小場村庄屋、山横目、大江守の役職にあった安藤幾平（則賢）が安政6年（1859）5月から、齊昭2度目の罪をすすごうと江戸にほど近い小金宿に詰めたとときの記録です。この時は前年8月に水戸藩にもたらされた勅諭問題^{ちよくじょうもんたい}もからんで、「義民」と称される2,000人以上の人々が周辺に集まりました。いわゆる第二次小金屯集です。幾平ら西・東・南・北各郡の山横目（大山守）らが連絡調整にあたっていたことなどがわかります。6月21日の記事には、鷲子村の薄井友衛門が、2,800両もの献納金の願書を携えて小金宿に来たことなども記されています。



▲安藤幾平筆「小金記談」一～三
（安藤家文書No.823～825、茨城県立歴史館蔵）



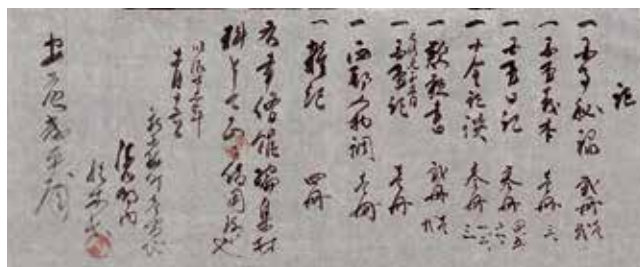
笹目 礼子 氏

近世史部会協力員
茨城県立歴史館副参事兼
歴史資料課長

このように幕末期、人々を直接行動に向かわせたのは何だったのでしょうか。市史の編さんを通してその背景にあるものに迫っていきたいと思います。

ところで、同じ安藤家文書の中に、明治25年（1892）11月16日付の史料があります。「小金記談」を含む安藤家所蔵の記録類を「聿修館編集材料」として借用するというもので、借用者は「新小梅町一番地 徳川邸内 鈴木長」。これはこの時期、水戸徳川家が「聿修館」という編さん局を進めていた編さん事業（のちに『水戸藩史料』として刊行）のために史料を借用した証です。水戸藩政の歴史著述であっても、ひろく歴史にかかわった人々の記録を収集している点に、編さん姿勢の謙虚さを感じます。

編さん事業は記録を発掘し、保存する活動でもあります。そうした意味でも市民のみなさんとつくる市史でありたいと思っております。



▲「記 [小金記談等借用]」
（安藤家文書No.918、茨城県立歴史館蔵）



■問い合わせ■

文化スポーツ課
文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）

記憶画にみる感染症

～はしかとパラチフス～

新型コロナウイルスの感染拡大に際し、感染症を対象とした歴史研究や史資料が改めて注目されています。諸沢地区出身の会沢忠（1904～1986）は、人生経験を回想して絵と文章に記録した記憶画を制作しました。今回はその中から感染症を描いた作品をご紹介します。

会沢は1915年頃、10歳の時に「はしか」にかかりました（図1）。現在のように麻疹ワクチンが普及する前は、はしかは乳幼児の死亡の重要な原因のひとつでしたが、普通に見られる病気のため、軽視されることもありました（山内一也『はしかの脅威と驚異』岩波書店、2017）。会沢の父親も「はしかに薬など必要ない」と言ったため、母は旅僧に頼んで祈祷してもらい、子どもの枕元で回復を祈りました。1928年には勤務先の日立鉾山でパラチフスにかかっています（図2）。会沢は駕籠に横たえられ、白衣にマスク、ゲートル履きの男性2人に伝染病治療院へ運ばれています。後ろには日立鉾山の煙突、工場と住宅が見えます。当時の日立市域は農業色の濃い茨城県の中で、日立鉾山や日立製作所など近代産業が発展する町として、県内他市町村や他府県の労働者が移入し人口が急増しました。一方で都市整備が追いつかず、赤痢や結核、腸チフス・パラチフスなど、感染症が多発しました（鉾山の歴史を記録す



▲図1：はしかにかかって祈祷を受ける



清水ゆかり氏

近現代部会専門調査員
（農研機構研究員）

る市民の会編『鉾山と市民』日立市、1988）。会沢の記憶画からは、公衆衛生や医学が現在のように発達する以前には、感染症が身近なものであったことが読み取れます。

会沢は記憶画の制作を通して、現代社会を築くまでの地域社会の歴史を次世代へ伝えようとしてきました。小冊子『古稀の素人が画く明治、大正、昭和の思い出』（自費出版、1974）と色紙96枚（1983・1984制作、常陸大宮市歴史民俗資料館山方館蔵）には、個人史に留まらず、明治～昭和の農業・農村や就業経験、戦後の社会変化などが絵と文章で記録されています。

常陸大宮市の「記憶遺産」と呼ぶべき貴重な資料です。『常陸大宮市史研究』第3号で詳しくご紹介しましたので、どうぞご覧ください。



▲図2：パラチフスに感染し伝染病治療院へ

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）

世界的な大きな変化の渦中で

「Withコロナの時代に適した生活」という言葉をよく耳にするようになりました。全国各地での祭礼中止も続々と報じられています。今年の今頃は、新型コロナウイルスという名称さえ聞いたことがなかったのですが、1年前には考えられなかったほど環境が大きく変化し、社会全体の動きも変わらざるをえなくなりました。市民の皆様から直接お話しをお聞きする現地調査を活動の大きな柱としている常陸大宮市史の民俗部会では、とても困った状況になったと感じています。さらに心配なのは、ここまで続けてきた伝統的行事の行く末です。変化することを全面的に否定するわけではありませんが、意に反して突然変えざるを得なくなってしまうのは残念です。

これまでも、少子高齢化等による担い手不足や後継者不足など、伝統行事を継続するにあたっての課題は少なくありませんでした。民俗部会が昨年7月に取材させていただいた鷺子山上神社夏季例大祭（鷺子のお祭り）の場合も同様でした。山車・屋台の運行は4年に1度になり、内容も時代に応じた縮小化が続いてきています。



大津 忠男 氏
民俗部会長
茨城県立歴史館 学芸課長

そのような中で、今年の当番になった地区の人々は、現実的問題に正面から向き合いながら、「伝統的祭礼とは何か」「祭礼継続のための諸問題を解決するにはどのような方策があるのか」を考え抜き、これまでとは違った祭礼プログラム（運行予定表）を創り上げました。その概要をこの3月末に発刊された『常陸大宮市史研究』第3号に〈資料紹介〉として掲載させていただいています。多くの問題を抱えながら祭礼を実施している他の地域の参考になることを期待しての報告です。

執筆当時、新型コロナウイルス感染症の問題は起きていませんでしたが、行事本来の意味やあり方と現実の課題を考え合わせ、より理想的な形で実施しようとする姿は、祭礼に限らずあらゆる生活の場において参考になるのではないかと考えています。



▲令和元年 鷺子山上神社夏季例大祭



▲屋台が並ぶ様子

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111 (内線344)

メノウ王国 常陸大宮

常陸大宮市では、諸沢地区で白色を帯びた透明、玉川流域で赤色や灰白色のメノウ（瑪瑙）が産することがよく知られています。メノウは、水晶や石英と同じ珪酸を成分とする鉱物ですが、水晶のように結晶せずに繊維状の構造であるため、硬くて粘りのあるのが特徴です。当市におけるメノウ使用の歴史をみていきましょう。

旧石器時代では、約3万年前の野上^{つぎぬき} 槻遺跡でメノウ製のナイフ形石器や石刃^{せきじん}（石の刃物）が採集されています。当市では、これ以降メノウが使用されるようになります。

縄文時代晩期には、小野天神前遺跡でメノウの石鏃^{せきぞく}（矢じり）が大量に作られました。メノウは薄く割るのが難しいのですが、300℃ほどで数時間加熱すると水晶や黒曜石と同様なガラス質に変質し加工が容易になります。同時に、独特の乳白



▲小野天神前遺跡のメノウ製石鏃
（渡邊 明氏 寄贈資料）



中村 信博 氏
考古部会協力員
（茂木町ふみの森もてぎ図書館
埋蔵文化財専門員）

色の美しい艶が出るのも特徴で、当遺跡の縄文人はこの技術を習得していたのです。北関東では、縄文時代を通して石鏃石材にチャートが主体的に用いられてきましたが、約3,200～2,500年前にあたる後期後葉～晩期の時期、当市から栃木県茂木町にかけてのエリアでは、このようなメノウ製の石鏃がチャート製を凌駕して作られ、周辺地域に流通していたことがわかってきました。その理由としては、縄文人がこの独特の優美さを珍重したからと考えられます。

北関東の古墳からよく出土する勾玉^{まがたま}は、赤色のメノウ製であることから多くが玉川産と考えられています。江戸時代になると、諸沢地区では火打石としてメノウが採掘され、江戸で流通していた火打石のほとんどが当地産だったといわれています。その後は、昭和の中頃までガラスの原料として採掘されていました。

以上のように、当市には3万年にわたるメノウ使用の歴史があり、特に縄文時代晩期、古墳時代、江戸時代では社会にはたした役割が大きいことからメノウ王国と呼んでも良いのではないのでしょうか。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）



佐竹東家の檜沢・高部地域支配

戦国時代の常陸大宮市檜沢・高部地域を佐竹氏の東家が支配していました。東家は、佐竹義舜の弟である政義から始まり、政義の子義堅や義堅の子義喬に引き継がれ、義喬から弟の義久が継承して、佐竹宗家を支えた家です。天正18年（1590）に義久が、佐竹氏の当主義宣から鹿島へ領地を与えられた時も、「本知行」であることを理由に支配を継続して認められていました。檜沢と高部は、東家にとって本領であると考えられていたのです。このように、東家と檜沢・高部地域の結びつきは深いものがあったと思われませんが、東家の当主は、義久が佐竹氏の南奥（現在の福島県）進出に活躍したように多忙であり、現地の支配に直接的に関わることは難しかったと考えられます。

そのような東家の支配を支えた家臣として、大窪伊賀守秀光があげられます。大窪氏は、本領を日立市大久保周辺とする東家の家臣でした。秀光は、義久の南奥進出を支えて活動し、天正6年（1578）7月には、大山義種・和田昭為・大縄義辰・小野崎隆元・小貫頼久と一緒に、岩城氏の一族船尾隆直と昭

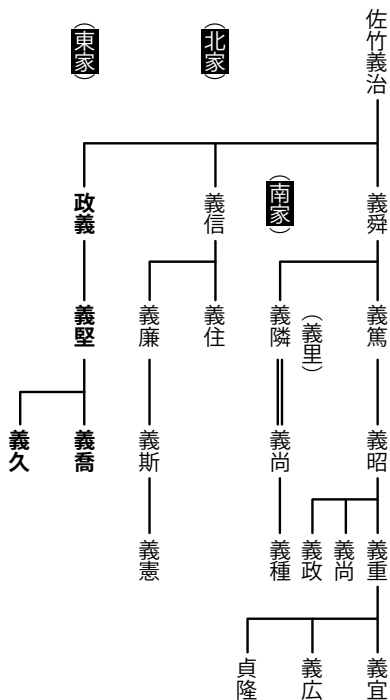


佐々木 倫朗氏
古代・中世史部会専門調査員
(大正大学文学部教授)

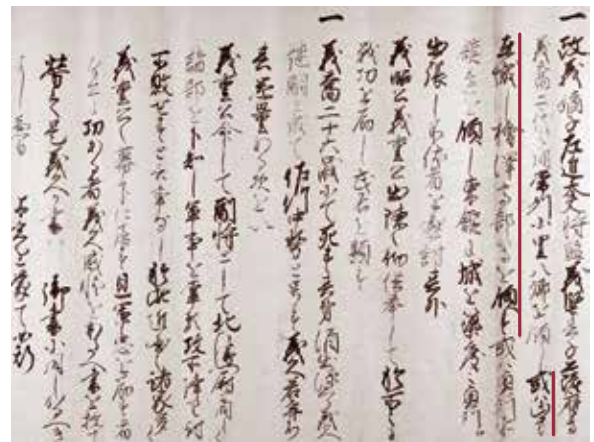
直に彼らの身柄を保証する文書を発給しており、大山らの宗家重臣と並ぶほどの地位を持っていることがわかります。このため、秀光は、宗家の直臣としての家格を保持していたと考えることができます。

秀光は、そのような南奥における活動ばかりでなく、檜沢や高部の支配も担当していたようで、義久の兄義喬からは、檜沢の支配に関して秀光一人に任せる意向を示されています。また、義喬からは檜沢ばかりでなく、東家の家中全体のことを一任する意向を示す史料も残されており、その信頼の厚さを窺うことができます。

東家の重臣としては他に国安氏もあげられますが、佐竹東家の檜沢・高部地域の支配は、大窪秀光や国安氏のような他地域を本領とする東家家臣を中心に行われ、これに高部氏等の地域に根ざした家臣が組み込まれていきました。



▲佐竹三家略系図（東家含む）



▲佐竹東家の由緒書（秋田県公文書館蔵）
※傍線部 「或ハ山方在城し、檜澤高部を領す」

■問い合わせ■

文化スポーツ課
文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）

久慈川・那珂川を行き交う舟や物資

常陸大宮市は北に久慈川、南に那珂川が流れ、江戸時代には幕府の領地から江戸に運ばれる米や、紙、こんにゃく、木材などのさまざまな物資が運ばれていたと考えられます。陸上輸送に比べ、低コストで大量の荷物を江戸や野州（現在の栃木県）と取引できたため、舟を使った物資輸送が発達しました。

川沿いには河岸（川岸）があり、舟や陸送の手配や荷物の積替え・保管にあたりました。このうち現在の常陸大宮市域では、久慈川には、上流から山方、高渡（高和田）、上岩瀬、那珂川には野田、長倉、野口、三美、小野、小場に河岸が設けられていました。小宮山楓軒によって編さんされた「水府志料」には、部垂村（旧大宮町）について、「東は川向にて小倉、富岡村也、此所に渡場あり（中略）久慈川、横瀬の地より来りて、宇留野村に流る、此所に板、たばこ、其外諸品荷受のかし（河岸）あり、此所より小場、小野等のかしへ馬付にて送る」とあり、久慈川を下ってきた荷物が馬の背に付け替えられ、陸路で那珂川の河岸へと運ばれていたことがわかります。小野村の四倉河岸（下河岸）の河岸守を務めた四倉家に残されている荷物の預り証文からも、西金村や袋田村（大子町）からの杉板が、高渡河岸から小野河岸へと運ばれたことがわかります。

昔の久慈川では、高瀬舟とよばれる小舟が、魚の干物や塩漬けなどを載せて各河岸へと立ち寄り、上



大内 正臣氏
近代支部会協力員
(茨城県立真壁高校教諭)

りには舟に帆を張り、流れが急な場所では兩岸に2～3名ずつ降りて引き綱で舟を引いたと言われていいます。高瀬舟や小鶴飼舟など、大小さまざまな舟が行き交ったほか、材木を組んだ筏（いかだ）が流れる風景が見られたことでしょう。幕府の城米や藩の特産物の輸送のほか、人々の暮らしを支えた那珂川と久慈川の水運ですが、明治～大正期に鉄道輸送が始まると、徐々に衰退していったようです。

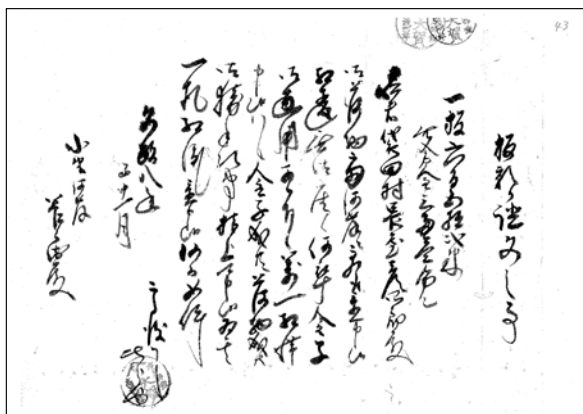


▲大桂大橋と小野河岸付近

常陸大宮市内にはさまざまな資料が残され、その保存や活用を目指して歴史民俗資料館や文書館などの公的機関をはじめ、郷土史クラブの皆さんなどが積極的に活動しています。新しい市史では、こうした活動の成果も活かしつつ、江戸時代の商品流通の様子を地域の資料を用いて明らかにしていきたいと考えています。

■問い合わせ■

文化スポーツ課
文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）



▲四倉家文書No.43「板預り証文之事」



明治初年の災害とその影響

－「小瀬一揆」とその時代を例に－

「小瀬一揆」と聞いて、市民の皆様はまず何を思い浮かべるでしょうか。「義民」の存在や、政府の政策（地租改正）との関連性は今まで何度も言及されてきました。それらは一揆を語るうえで重要な要素です。

しかし、一揆の中心人物の一人となった上小瀬村（現市内上小瀬）の町甚左衛門らが、直前に県令に対し提出した「歎願書」のなかで、地租「延納」をもとめる理由として「災害」の存在を持ち出しているとおり、一揆およびその過程でみるべき要素はほかにもあります。すなわち、歎願書には「抑当上小瀬村並に緒川沿岸一体の諸村ハ去る明治五年七月十三日の洪水並に翌明治六年九月十日暴風之為耕作物皆無に属し」とあります。

冒頭にこれらの災害が持ち出されている点から、当時の農民たちにとってかなり大きな出来事であったと思われます。こうした災害とは、具体的にどのようなものであったのでしょうか。まだ確たる被害状況を分析できるにいたっていませんが、たびたび、これに類する災害（緒川の水害か）があったのは当時の史料からみても確かなようです。同じく緒川沿岸に位置した野口平村（現市内野口平）では、明治7年（1874）中に「川欠」（＝水害により農地として使用不能になった田畑）があったことによる「永引」（＝年貢賦課地から一定の面積もしくは高を最初から除外）の件

で、村長・戸長・区長が県に対して検査を「再願」しています（「川欠永引再願之儀」明治8年 野口平区有文書）。このなかでは、「地租改正」を実施するにあたって「指支候二付」とあります。



▲歎願書（個人蔵）



飯塚 彬氏
近現代史部会協力員
国文学研究資料館
資料整理等補助員

小瀬一揆がおこったのは明治9年で、「歎願書」の「洪水」と「暴風」の記載は明治5・6年の出来事で時期には開きがあります。ただ、水害があったことによる「川欠」が地租改正に影響を与えることが危惧されているのと同じように、農民たちにとって災害の存在は忘れ難いものであったのでしょうか。

小瀬一揆に関する伝承は「義民」を中心として数多く伝わっていますが、この一揆をおこすにいたった農民たちの同時代的な状況、そして地域の状況はまだまだ調べる余地がありそうです。

市民の皆様とともに、この複雑な時代について考えていきたいと思えます。情報提供など何卒よろしくお願い申し上げます。



▲川欠永引再願之儀（野口平区有文書No.48）
茨城県立歴史館寄託資料

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）



常陸大宮市と獅子舞

「佐竹野口村青木角助」

東日本に広く伝わる風流^{ふうりゅう}の獅子舞（茨城県内では「ささら」と呼ばれることが多い）では、秘伝の巻物を有している場合があります。栃木県北部から福島県会津地方の獅子舞には、同種の巻物が多く伝えられており、会津若松市高野町木流に伝わる巻物には「佐竹野口村青木角助」という名前が確認できます。「佐竹野口村」は、現在の御前山野口地区で、この記述に従えば野口村の青木角助という人物が獅子舞の祖ということになります。

秘伝の巻物の不思議

巻物には難解な由来や歌が書かれています。

まきあとを	なけく計の	なみたこそ	なかれの末の	なかきたきつせ
むつましく	むすぶちきりの	むつ事も	空しき空の	むらさきの雲
あわれさも	跡に残て	あしきなや	あけほのてらす	ありあけの月
みつ塩に	みのりのふねの	みなれさお	ミたのちかいに	身はうかびけり
誰も皆	たのみをかけよ	たねもなく	たりきのしんそ	たい仏とハ成
ふたつなく	ふしやのせいぐわん	ふしきにて	ふかいねかいそ	ふたいとハなる

▲六字の歌（『鹿沼市史 資料編 近世1』より）

例えば、「六字の歌」は六首で構成され、第一首目に「まきあとを なけく計りの なみたこそ なかれの末の なかきたきつせ」と書かれています。これだけ見るとなぜ「六字の歌」とされるのか、よくわかりませんが、六首の句頭だけをみていくと「南無阿弥陀仏」になっていることに気が付きます。「歌」ですが、見るのが前提で作られていることがわかります。しかし、巻物の多くは「開いたら目が潰れる」と言われ、めったに開封してはいけないとされています。見ないと仕掛けがわからないのに、見てはいけない。巻物を書き伝えた人物は神仏に詳しいユニークな人物であったかもしれません。



伊藤 純氏
民俗部会専門調査員
川村学園女子大学文学部講師

最古の獅子頭!?



▲下町の屋台蔵から発見された古獅子頭

茨城県有形民俗文化財に指定されている「ささら獅子頭 三点」(常陸大宮市歴史民俗資料館寄託)は、3点のうち2点に永正14年(1517)の墨書銘があります。現在、風流の獅子舞の最古の獅子頭とされています。頭にかぶるには少し小さく、横木を握り、火伏せや疫病除けとして持ち歩いたものと思われます。

現在、常陸大宮市には獅子舞の伝承はありませんが、このように獅子舞の歴史を解き明かす重要な地域だと注目されています。なぜ佐竹野口村が発祥地とされ、古い獅子頭が残るのか、その歴史・文化の背景についても考えていきたいです。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111 (内線344)



一騎山古墳群の埴輪

常陸大宮市は那珂川と久慈川という大きな川が流れ、この2つの川とその支流に沿って多くの古墳が築かれています。しかしながら、発掘調査が行われたものは少なく、その様相が明らかにされたものは多くありません。そうした中で、市内の下村田に存在した一騎山古墳群は、古墳の内容が判明した貴重な事例です。古墳群は高校の建設予定地として発掘が行われ、前方後円墳1基と円墳3基、それと竪穴住居跡が6軒見つかりました。古墳が作られた時期は、出土した遺物から6世紀代と考えられます。

このうち、前方後円墳である一騎山4号墳では、埴輪が立てられていたことが分かりました。人物埴輪や動物埴輪など、大半は古墳をめぐる溝の中に倒れこんでいましたが、円筒埴輪のいくつかは元の位置を保っていました。人物は武人と男子、それに女子があり、動物は鹿と考えられるものが見つっています。これらの埴輪は出土した位置から、墳丘の北から西側にかけて一列に並んでいたのではないかと想定されます。

なかでも目を引くのは、人が台によじ登っているように見える埴輪です。頭や台は欠けている部分が多いのですが、両手を台につき、顔は前を見上げていたような姿をしています。いわゆる「跪く埴輪」と呼ばれるものの一つと考えられます。この埴輪は、誅を奏上している姿を表していると言う説があります。誅は人の死を悼み、生前の功績をたたえその人の系譜などを唱えるもので、日本書紀などに記述があります。おそらく、後継者が先代を引き継ぐ意味で行われたもので、重要な儀式であったのでしょう。



▲武人埴輪（破片）



小澤 重雄 氏
考古部会協力員
茨城県立歴史館
史料学芸部 学芸課 主席調査員

茨城県内での「跪く埴輪」は、動物の帽子をかぶっていることでも有名な桜川市出土の埴輪のほか、銚田市不二内古墳、行方市三味塚古墳などで出土しており、関東地方のなかでも比較的多く分布しています。ただ、一騎山4号墳の埴輪のような姿は、県内では例がありません。台に見える部分も単なる埴輪の台座ではなく、何か別のものを表したものでしょうか。

一騎山4号墳の埴輪がどこで作られたのか、今のところ定かではありません。一騎山4号墳の埴輪を改めて見直したところ、武人埴輪の破片がありました。これをみると、鎧は線刻で格子状に表現されています。このような表現方法は、県央部の武人埴輪に見られるものです。この地域には、ひたちなか市馬渡埴輪製作遺跡と茨城町小幡北山埴輪製作遺跡と2つの埴輪製作遺跡があり、一騎山4号墳の埴輪はどちらかの影響を受けて作られたと考えられます。



▲跪く埴輪

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）



了譽聖岡上人の果たした役割

了譽^{りょうよしょうげい}聖岡上人は、南北朝～室町時代に活躍した浄土宗の学僧です。瓜連常福寺では、聖岡上人の命日に合わせて「ろくやさん」(二十六夜尊)の法要が毎年執り行われています。そのため地元の方ならば御存知の方が多のですが、全国的には知名度はほとんどありません。しかし聖岡上人は、江戸初期から明治末期に至るまで繰り返し伝記が作成され、怪談『番長皿屋敷』で皿が1枚足りないと嘆くお菊の霊を鎮めた僧侶として(全く時代が合わないにも関わらず!)描かれるほど、広くその名を知られていました。なぜ聖岡上人はこれほど注目され、また忘れ去られたのでしょうか。浄土宗の歴史とともに考えてみましょう。

鎌倉時代に法然上人がおこした浄土宗は、優秀な門弟たちに引き継がれましたが、法然上人の死後、宗内に多数の流派(学派)が生まれます。法然上人が旨とする浄土教は、「南無阿弥陀仏」と念仏をとさえすれば極楽浄土に往生して(生まれ変わって)救われるという明快な教えでした。そのシンプルさゆえに、念仏をとさえするにしても、口に出すのか、心に念じるのか、念仏は1回か、100万回か、心の底からとさえするのか、ただとさえするだけでよいのか、宗内でも意見が分かれたのです。



▲『了譽上人絵詞伝』文政5(1822年)



鈴木 英之
北海学園大学 教授
古代・中世史部会協力員

鎌倉時代に法然上人が開いた浄土宗は、新しい仏教宗派であり、また念仏を重視するため、意図せずとも他の宗派から批判を受けやすい立場にありました。教義が分裂した状態では、他宗の批判に対抗することはできません。そこで聖岡上人は、浄土教義を統一し、未整備だった教団の基礎を創りあげたのです。聖岡上人の教学は、弟子の聖聡(東京・増上寺開基)の宣揚活動もあり、浄土宗の中心的な教学となります。

その後、浄土宗は、徳川家の庇護下に入って大きく勢力を伸ばし、浄土宗の檀林教育(浄土宗の初学者教育プログラム)では、宗祖法然上人の教えよりも、まず聖岡教学を修学することが定められました。これは浄土教の枠組みを、聖岡教学によって理解することを意味します。上人の活躍がなければその後の浄土宗の発展はなく、その偉業から聖岡上人は浄土宗第七祖として讃仰され、数多くの伝記が作られることになったのです。しかし明治期に入ると、宗祖・法然の教えに回帰すべきとの判断が宗内でなされ、聖岡教学は学問の中心から離れ、一般の人々の記憶からは徐々に消えていくことになりました。

2019年には芝増上寺で聖岡上人の600年遠忌が執り行われました。また近年、聖岡上人を対象とする研究者も増え、その思想や事跡が注目を集めています。常陸大宮市史では、聖岡上人の十数種ある近世の伝記を列挙し、常陸大宮市に関する記述を中心に取り挙げて、聖岡上人の生涯を追っていきます。ご期待ください。



村の絵図と検地帳

茨城県立歴史館では、7月15日から「絵図・地図・アーカイブ図―描かれた茨城の都市と村」という企画展（アーカイブズ展）が開催されます。近世から近代にかけて作成された絵図や地図を紹介する展示です。

近世（江戸時代）、絵図はたくさん作られました。常陸大宮市域でも現存する絵図はいくつもあります。村全体を描いたもの、村の中の一部分を描いたもの、山や河川を描いたものなど、用途に合わせて様々な絵図があります。平成8年（1996）に刊行された『美和村史料 近世村絵図』（美和村史編さん委員会編、美和村発行）は当時の美和村に残る近世の絵図を集めたものです。旧美和村は近世には7ヶ村あり、その内5ヶ村の絵図が残っています。5ヶ村の絵図は天保年間（1831-1845）に行われた水戸藩の天保検地に伴って作成されました。

旧美和村と同様に、天保検地に伴って作成された絵図は、常陸大宮市域の他の地域にもあります。たとえば、茨城県立歴史館所蔵の野口平区有文書には「(野口平村絵図)」があります。野口平村は平成の大合併以前の市町村では旧御前山村にあたります。茨城県立歴史館には天保10年(1839)から大正4年(1915)にかけて、約800点の史料が所蔵されています。「(野口平村絵図)」の作成年は史料に書かれていないため確定できません



茨城県立歴史館 史料学芸部 歴史資料課
主任学芸員 武子 裕美
近世史部会協力員

が、野口平区有文書には天保13年の検地帳が遺されており、野口平村における検地の様子がわかります。

天保検地に伴って作成された字ごとの絵図が野口平村にもあるはずですが。「那珂郡野口平村御検地野帳〔3冊の内3〕」（資料番号：野口平区有文書215）は天保13年9月20日から作成された検地に関する帳面です。開いてみると、検地を行った日付、土地の字名、土地の等級、広さ、所有者などが書かれます。帳面の最後には全ての土地の数と、それぞれの地域の役人の名前が列記され、野口平村の庄屋などが署名して印を押しています。こうした検地に関する情報は、文字で残すと共に、絵図でも残されます。

常陸大宮市域には、これまで発見されていない絵図がまだまだあるかもしれません。絵図は村のことを知るにはとても良い史料です。情報をお持ちの方は常陸大宮市史編さん室までご連絡ください。常陸大宮市の歴史を紐解いていきましょう。



▲那珂郡野呼村御検地野帳(3冊の内3)

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)



小学校、はじまる

こんにちは。近現代史部会の三村と申します。市史の調査をしていると色々と面白い資料に出会うのですが、そんななかから今回は明治6年(1873)の野田村の小学校開校行事に関する史料を紹介いたします。

野田区有文書という史料群のなかに、「御布達留」という冊子があります。この史料は、茨城県からきた布達や指令を、戸長(村に置かれた行政の責任者)が書き留めたものです。この「御布達留」のなかに、「三小区学区取締」から通達された「開校当日規則」があります。当時の茨城県の行政区画は大区一小区一村で構成されており、「三小区」は野田村が第十一大区三小区に所属していたことを示します。また「学区取締」は、教育事務を担当する役職でした。

さて「開校当日規則」では、6月30日午後1時集合、赤飯と酒を準備するよう指示しています。また集められた子弟の席順が決められていました。第一に士族の子弟、そのあと正副戸長の子弟、伍長(村内に5~10戸ごとに置かれた)の子弟、最後に平民の子弟という順番でした。身分制の感覚が、明治になっても地域に存在していたことをうかがわせます。

開校行事は教員による「読書講釈」のあと、生徒を退席させて赤飯と酒が振る舞われました。しかし、酒は戸長・副戸長・伍長だけとわざわざ指示されています。

教員は残念ながら?飲めなかったようです。規則の最後には「取りみだし候義は一切無之様、堅ク申含篤ト注意可致事」とあり、ぬかりがないよ



▲御布達留



防衛大学校 人間文化学科 准教授
三村 昌司
近現代史部会専門調査員

う念を押しています。小学校という新しい制度の出発にあたっての役人の意気込みが感じられます。しかし、小学校建設に対する地域住民の動きは全体的に鈍く、7月に県は小学校設立・維持の告諭を出しました(『茨城県史』近現代編、49頁)。

『御前山村郷土誌』によれば、明治6年に長倉小学校が蒼泉寺を仮校舎として創立され、野田に分校を置いた、とあります(315頁)。今回の史料では、新たに分校の開校日や開校行事の様子がうかがえました。調査を進めてこのような発見を積み重ね、新しい地域の歴史像を市民のみなさんにお示しできればと思います。



▲開校当日規則

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)

【広報 常陸大宮5月号のお詫びと訂正について】

広報 常陸大宮5月号の18ページ「常陸大宮市史編さんだより」の記事に誤りがありました。

お詫びして訂正いたします。

〔正〕 那珂郡野口平村御検地野帳 〔誤〕 那珂郡野呼村御検地野帳



むかしの女子会

「子安講」(長田地区)

旧山方町^{おさだ}の長田^{ほころ}では、写真のような祠をいくつも確認することができます。県道沿いにあるものが多く、他の地域よりも目立ちます。県道102号線沿いに三つ（仲寺田・寺内地区合同、羽出庭・鍛冶屋入地区合同、荒屋地区）と、仲内地区の一つあります。元来の場所から移設され、いくつかの石仏や石碑を一緒にお祀りするようになったものが多いようです。

「馬頭観世音」「二十三夜供養塔」「百萬遍供養塔」など合祀されている神仏は様々ですが、祠内に必ずお地藏様が安置されていることと、そのお地藏様に「ザクマタ（ザガマタ）」という卒塔婆（二股に分かれたY字状の枝の表面を削り文字を書き入れてある）が奉納されていることは、四箇所とも共通です。荒屋地区の祠には二十数本もの「ザクマタ」が奉納されています。奉納者として「子安講」「女人講」の文字が見え、長田の各地区には女性の講（グループ）があったことがわかります。

仲内地区の祠は「地藏さん」とか「子安さん」と呼ばれています。近くにお住いの海老根一さんからは、地区内12戸の奥様方でつくる「子安講」というグループとこの祠の関連が深いことをご教示いただきました。「子安講」とは、地区内全戸の奥様方で構成されたグループです。年に3～4回、「ヤド（当番の家）」に集まって女性だけの会を開いていました。赤飯や煮物が用意され、よもやま話をしながら



▲荒屋地区の祠



茨城県立歴史館 史料学芸部 学芸課
特任学芸員 大津 忠男
民俗部会部会長

ら午後の一時を楽しく過ごす、今でいえば、“奥様方の女子会”といったものでしょうか。「ザクマタ」はこの講で何か行事をした際に奉納したそうです。

仲内の「子安講」では、行事の際に安産祈願で有名な延生の地藏尊（栃木県芳賀町）の掛け軸をかけていました。地区のお嫁さんの妊娠や安産を地区全体の女性陣で見守り、無事をお祈りすることが大きな目的だったのです。ただし、この会に参加できるのは各戸から奥様一人だけで、お姑さんが引退してからでないとお嫁さんは入会できない規則がありました。

このところ、講の活動は中断されていますが、かつての暮らしぶりや考え方を垣間見ることができる貴重な事例だと思います。



▲仲内地区の祠

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)



再葬墓だけじゃない！

縄文時代の小野天神前遺跡

常陸大宮市の遺跡や遺物で一番有名なものは？とたずねられたら、皆さんは何を思い浮かべますか？やはり泉坂下遺跡の「いずみちゃん」、それとも坪井上遺跡の「ヒスイの大珠」でしょうか。ここで取り上げる小野天神前遺跡も、1976年の学術調査で弥生時代の再葬墓を調査し、3点の人面付壺形土器が出土していることで著名ですが、その調査の以前からたくさんの縄文時代の遺物が出土する場所として知られていました。1976年の調査は再葬墓を確認することが目的でしたので、調査及びその後の調査報告書は弥生時代の再葬墓がメインとなりましたが、この調査では縄文時代の竪穴住居跡や多量の縄文時代の遺物が出土しています。今回、市史を編さんするにあたり、これらの遺構と遺物の再整理を行いました。

小野天神前遺跡は、小野字天神前に所在し、那珂川左岸の河岸段丘上に立地しています。調査区は遺跡のほぼ中央部の台地上から斜面部にかけて設定され、縄文時代の遺構は住居跡が2軒確認されています。再葬墓群よりも北側の斜面にかかる辺りで、縄文土器も調査区の北側からより多く出土している傾向がありました。第1号住居跡は、4mほどの範囲に土器埋設の石囲炉と、それを囲むように柱穴が確認できました。床面付近からは、後期中葉の加曾利B1式からB2式の土器が多く出土しています。

第3号住居跡は、径4mほどの円形で、後期前葉



▲小野天神前遺跡の整理作業①：実測



茨城県教育財団 次席調査員
江原 美奈子
考古部会 協力員

の堀之内1式から2式の土器や、石鏃・磨石などの石器、ハート形土偶の胴部片などが出土しています。常陸大宮市域では、後期の住居跡はほとんど確認されていませぬので、貴重な例となります。遺構外からは、住居跡と同時期の遺物のほかに、後期後葉から晩期中葉の土器が多量に出土しており、長期にわたりこの地域の中心的なムラのあとであることが再確認できました。常陸大宮市域では、数多くの縄文時代中期の遺跡が確認できますが、後期以降になると数が減り、那珂川流域の小野天神前遺跡や久慈川流域の泉坂下遺跡など、流域の中心的な遺跡に集中するようです。今後の資料分析を通じて、常陸大宮市の縄文時代の様相を明らかにしていきたいと思ひます。



▲小野天神前遺跡の整理作業②：拓本

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)